

人とまちを結ぶ情報紙
広報おたけ

NEWS LETTER OTAKE

2001
11
No.1010

和紙、

その
技テクニックを伝える。

(257ページ)

10月14日 大竹手すき和紙の里

和紙、

その技を伝える。

たつぷーん たつぷーん。「すき舟」という水槽の中で木枠の「かせ」を軽快に前後に動かし、どろりとした和紙のもとをくみあげる音が作業場に響いています。

県内唯一の手すき和紙の産地大竹。しかし、その技術を守ってきた人々が高齢で、存続が危ぶまれています。防鹿にある「おおたけ手すき和紙保存会」では、今年6月から、その伝統の技を伝えるための伝承者養成講座を始め、3人の方が技術習得に励んでいます。そんな大竹のこころ、手すき和紙をめぐる人々の思いを探ってみました。



伝統の技を守る 手すき和紙保存会

現在、市内で和紙をすいているのは、「おおたけ手すき和紙保存会（吉村芳信会長）」に所属する宮本ムツ子さん（70歳、防鹿）ただ一人になっています。和紙の材料づくりや乾燥作業などを担当する夫の宮本寿人さん（72歳）と、二人三脚で手すき和紙の生産に励んでいます。

最盛期には、1,000軒もの生産者がありましたが、昭和50年代末には、大村調一さん（故人）のみとなっていました。その大村さんが高齢のため紙すきをやめ、昭和63年に発足した「おおたけ手すき和紙保存会」で、かつて紙をすいていた数人が、技術の保存に努めてきました。その人たちも高齢で次第に現役を退き、今は宮本さん夫妻が生産しているだけとなりました。

ムツ子さんは防鹿に生まれ、昭和24年に19歳で結婚しました。家内工業である手すき和紙の生産は、家族の労働力が欠かせません。とりわけ、すき作業は女性の役割が大きく、ムツ子さんも和紙をすき始めました。朝5時から夜中まで、食事の時間も惜しんで作業を続け、技術を身につけていきました。普通、製品とな

る和紙がすけるようになるには、3年程度かかるといわれています。最初は、なかなか満足できるものができず、悔しい思いもしましたが、12年間、和紙をすき続けました。

その後、20数年手すき和紙の現場から離れていましたが、保存会の発足を機に再び和紙をすき始めました。

また和紙のことを知ってもらいたいと、小学校の体験学習や大竹高校の授業にも出向いたり、学校と連携した活動も積み重ねてきました。

しかし、昨年ムツ子さんが体調を崩し、和紙がすけなくなってしまう時期がありました。このままでは、伝統の技術がとだえてしまうことを心配した保存会は、後継者の育成に本格的に取り組むはじめました。

大竹手すき和紙の歴史

大竹の手すき和紙は、豊富な小瀬川の水を利用し、江戸時代の初期から生産され始めたといわれています。藩の専売品として栄え、19世紀の初めには、紙すきをする人は、現在の市域で2,731人に達していました。

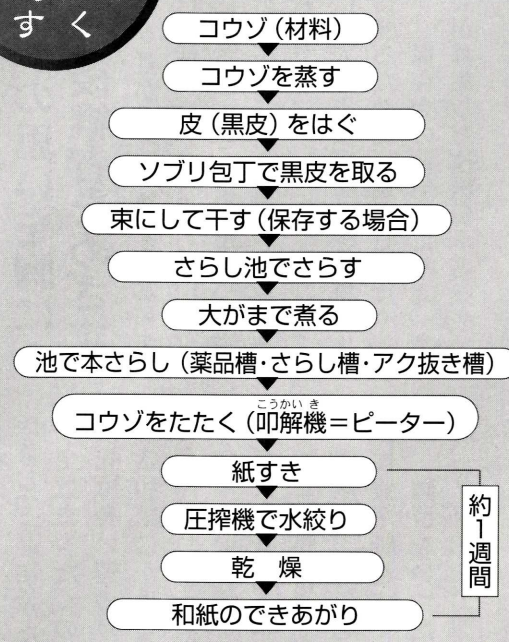
幕末の長州戦争による戦火や廃藩置県に伴う専売制の廃止という難局を乗り越え、技術改良や生産性の向上を図っていき、最盛期の大正8年には1,000軒の生産者を数えるほどでした。

しかし機械化の波や生活様式の変化による和紙の需要の減少などで、次第に紙すきは衰退していきました。

また昭和26年のルース台風の被害で、生産者が打撃を受けたり、そのほかさまざまな要因により、生産者は減少していきました。

鹿すく

手すき和紙の できるまで



皮をはいで保存されたコウゾ コウゾの木



二人三脚で技を守る 宮本さん夫妻



コウゾ踏み
コウゾの皮を足でもみながらはく作業
(元町4丁目付近の川原
大正中期～昭和初期ごろ)

和紙への思いを胸に 後継者をめざす

今年6月から「大竹手すき和紙の里」は、活気づいてきました。防鹿にある手すき和紙の里は、水道局の元の住宅2棟を作業場として改装したものです。

そこに3人の男女が手すき和紙の技術を習得するために、週2日程度やって来ます。保存会の要望にこたえ、教育委員会が募集した技術伝承者養成に

やればやるほど 奥が深い

岡野輝則さん(35歳 東栄一)

去年の暮れにテレビ番組を通して、大竹の手すき和紙のことを知りました。それで何となく気にはなっていたんですけど、妻が広報紙で募集を見て、やってみようと言いだしたのがきっかけでした。本当は一緒に習いたかったのですが、ふたりでやるのは難しかったので、結局ぼくがやることになりました。

手すき和紙に関しては、まったく体験したことはありませんでした。でも昔から陶芸とか、自分の手で何かを作るといことが好きだったので応募しました。

応募してきた方がたです。

全員まったくの初心者で、まだまだ先は長い道のりのようですが、手すき和紙にかける思いには、熱いものが感じられます。

職業も会社員、主婦、自営業とさまざまな3人。忙しい時間を縫って、手すき和紙の里に通って来ます。

夏場は、のりの役目をするトロロの性質が紙をすくのに適さないため、講習をいったん休んでいましたが、9月から再開しました。



紙の厚さのコントロールが難しいですね。どれだけ「かせ」を揺すれば、どれくらいの厚さになるのか。薄いのは厚くできるけど、厚くなりすぎると、どうにもならない。(笑)

もし習得できれば、手すき和紙という大竹の伝統を若い世代にも伝えていきたいと思っています。趣味を越えたものとして、ずーっとやっていきたいですね。宮本さんも優しく指導してくれるし、やりがいを感じています。

ぬくもりを 手渡ししたい

鍵山幸恵さん(52歳 広島市西区)

新聞記事で募集を知りました。もとも手先を使ってものを作ることが好きでした。今までもタペストリーを作ったり、手描き友禅をやったりしていました。

和紙にも興味があり、和紙のことが載っている記事などを切り抜いて集めています。和紙を生活の中に取り入れ



ることができたらいいと思っています。手すき和紙には、手のぬくもりを感じます。それを人に渡すことができたらいいんですけど。人から人にぬくもりを伝える、そんな時代なんじゃないでしょうか。



乾燥も年季が必要

仕事や子育てに一生懸命がんばってきたけど、立ち止まって考えてみよう。ゆっくリズムというんですか。人生まだまだ長いので、「きゃぴきゃぴ」のおばあさんになっていきたいですね。夢は、和紙でその人その人の感性に合ったものを作りたいです。まだまだ難しすぎて、簡単にはできないのですが、徐々にでも上達していくのが楽しくもあります。

繰り返す地道な作業

すき舟の前に立ち、ムツ子さんがすいてみせると、その手つきを真剣なまなざしで見つめています。その後自分たちで一連の作業を繰り返し、繰り返してやってみます。ムツ子さんの手つきと比べると、まだまだぎこちなさがあります。そばで見つめるムツ子さんが、ときどきアドバイスをしていきます。

「最初に比べると随分上達してきましたが、まだ揺することによって一生懸命みたいです。厚みを考えながら均一にすけるようになれば一人前です。今は悪い材料ですけれども、障子紙のようないい材料ですって、どんな道具になるかですね。ムツ子さんは、そう感想をもらいます。

今年いっぱいはいは、すぐ練習をしていきます。年明けからは和紙の原料になるコウゾやのりになるトロロアオイを採取し、材料準備の作業に入る予定です。厳しい冬が本番の手すき和紙。後継者としての正念場ともなります。

技術を身につけるまでには、長い時間が必要です。伝統文化として生きていくのか、産業として再生していくのか、今後ますます後継者に注目が集まります。

大竹のために 何かやりたい

二階堂裕一さん(30歳 木野一)

2年前まで雑誌編集の仕事をしていました。結婚を機に大竹に帰ってきました。自分で会社を始めました。とりあえず1年間は、仕事一筋でがんばってききましたが、1年たったころ何か始めたいなと思っていたときでした。広報紙の後継者募集を見て、「ビビッ！」ときたんです。

広島で情報誌の仕事をしているときにも、大竹のまちをブッシュするようになっていたんですが、地元に戻って、大竹のために何かやりたい、イメージアップにつながるようなことをやりたいと思っていました。学生時代には、ずっとスポーツをや



っていたので、今度はスポーツ以外の何かをやってみてみたいなんです。熊野町とかは、筆を使ったまちづくりをしたりと、仕掛けが面白いと思います。大竹も和紙を使ったまちづくりをしていけたらと考えています。先は長い！初めて試してみたい感じがしました。自分の計画では、1年でマスターできると思っていたんですが。(笑)

紙をすく工程



コウゾの繊維を溶かした液(テギ紙)が入った「すき舟」にトロロをくんで入れる

マテ棒でテギ紙とトロロを混ぜる

熊手でさらにかき混ぜる

「かせ」の上に目の細かい「す」のをせる

最初は大きく次第に小さく揺すりながらすいていく

最後に「す」の上に残った液をすてる

すいた紙を「床(とこ)」に重ねて置く

~手すき和紙の里で体験学習~

10月5日、山県郡加計町の加計小学校の3、4年生40人が手すき和紙の里を訪れました。

社会科の授業で、広島県の伝統産業を学ぶためです。

子どもたちは、手すきのはがき作りに挑戦しました。

「リンスみたい」と子どもたちが言う、トロロの混ざったテギ紙で作ります。すくというよりは、手づかみで小さな木枠に盛っていくといった感じです。

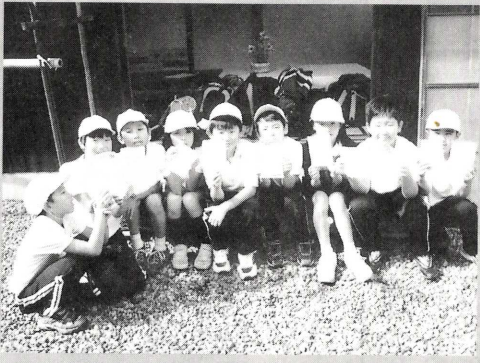
順番に木枠から取り出し、乾燥機で乾かしてできあがり。

手作り感いっぱいのはがきを満足そうに見せてくれました。



コウゾとトロロの混ざったテギ紙はリンスみたい

オリジナルはがきのできあがり



手すきはがきを 作ってみませんか

個人、グループでも体験できます。

体験料 1枚 100円

(事前に予約が必要です)

申し込み・問い合わせ

おたけ手すき和紙保存会

(宮本宅 ☎72514)

描

かく

健やかにと 願いを込めて

手描き鯉のぼりのころ

10月12日、手描き鯉のぼり作りをさせている大石雅子(69歳、元町4)さんが玖波小学校5年生の授業で講師を勤めました。

地域の産業を学ぶため大石さんが招かれ、子どもたちからの質問に答えていきました。

鯉のぼりの歴史や大石さんが鯉のぼり作りに関わり始めたいきさつ、鯉のぼりやすき和紙に寄せる思いの数々を語られました。

手描き鯉のぼりの生産は、昭和20年代から40年代初めにかけてが盛んでした。市内にも8、9軒の業者があり、1軒で数人が生産に携わっていたという事です。

和紙の鯉のぼりは、風を受けてバサツバサツと威勢良く泳ぐ姿や和紙の手ざわりに魅力がある反面、雨に弱く常に空模様を気にしていなければなりません。それに加え、布製のものや化学繊維のものが市場に出回り、だんだんと和紙の鯉のぼりは、減っていききました。

現在、和紙の手描き鯉のぼりを作っているのは、おそらく全国でもほかにない、貴重な存在ではないかと思われまます。

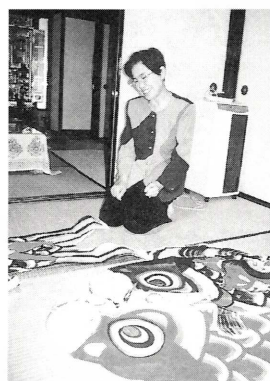
しかし、生産量は最盛期だった昭和40年ころの年間2、000匹と比べると200、300匹程度にまで減少しています。最近では、庭先で揚げる大型のものよりは、1.5皿程度の室内で飾る民芸品としてのものが人気です。

ここでも後継者には苦慮しています。それでも、興味を持って大石さんのもとに通い技術を学んだ方が、忙しい時期やイベントなどのときには、手伝ってくれるという心強い話もあります。

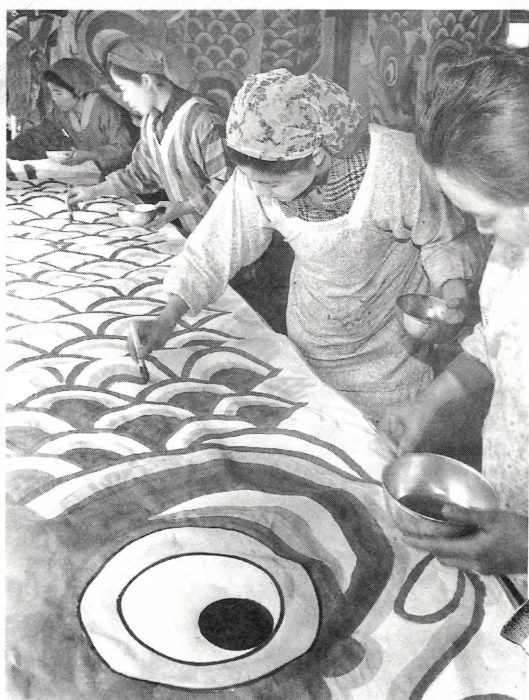
また、大竹の和紙を愛し、大竹の和紙にこだわっていききたいとの思いから、今回の手すき和紙の後継者養成にも期待を寄せています。

大石さんは「この鯉のぼりがだれのところに届くのだろうか、どこか空を泳ぐのだろうか」そんなことを思い浮かべながら一つ一つ作って行くそうです。

「鯉のぼりは、子どもが生まれたとき、元気に育ってほしいという、周囲の願いで買ってもらえます。そんな気持ちにこたえていきたい」と子どもたちに優しく語りかける大石さんでした。



子どもたちに語りかける大石さん
(10月12日 玖波小学校)



昭和40年代初めごろの鯉のぼり作り
(左から2人目 大石さん)

筆は
熊野産で
オーダーメイド

スペイン通りから 和紙発信



大竹駅前スペイン通りの中ほど、「大竹和紙工房」の看板が目をはきます。駅前商店街が空き店舗を利用し、平成8年に工房をオープンし、6年目になりました。管理運営をする駅前商店街は、まちづくりの一環として、地域文化を発信する拠点に和紙工房を位置付けています。大竹の顔ともいえる駅前商店街に活気がなければいけない。そんな思いのなか、大竹の和紙という文化にこだわ

り、和紙工房を始めました。現在も市のバックアップを受けながら新たな方向を模索しています。

店内には、ところ狭しと和紙の商品が並んでいます。人気の鯉のぼりちようちん、絵はがき、コウゾの木を使った写真立て、タペストリー、モバイルなどなど、バラエティに富んだ商品でいっぱいです。

この商品開発や店の管理をしているのが、ボランティアの皆さんです。

▲和気あいあいと和紙をカットしてはがきを作ります
(ボランティアスタッフの皆さん)

▲大竹の文化を伝えたい(広中さん)



ここに来られる方も市内よりは、市外からの方が多く来られました。九州からも大勢が訪ねて来られました。中国の都江堰市の市長も来られましたし、そういった市にとってのお客さんも受け入れる役割も担っていると思います。そして大竹出身の方にとっても、ここは郷愁を覚える場所ではないでしょうか。

夏休みに実施した工作教室も今年は13回を数え、子どもたちの間でも定着してきた感があります。子どもたちにも和紙というものを通して、これからのまちを考える場になってくれたらと思います。

商店街の方とボランティアの方との夢が大きく広がる和紙工房でした。コウゾや和紙を使った工作などが体験できます

問い合わせ
大竹和紙工房 (☎03641)
開館 月・火・金・土曜日
10時〜16時

和紙のことについて知りたい
市立図書館には、和紙についての本のコーナーがあります。

問い合わせ
市立図書館
(☎05338)



大竹の特産品として知られている手すき和紙。その和紙が21世紀に残っているか、岐路に立っている。そんな和紙に関わってきた方の思いを少しでも伝えることができなかと企画した。自分も手すき和紙を体験させてもらい、その仕事の大きさの片りんを垣間見た。すきあがった和紙のもつ温かみに触れると、この取材で出会った方がたの笑顔を思い出す。

広

ひろげる

